

いと近ければ、心細くなる御声絶え聞え、尾君「いとかたし

けなき業にも憐れかな。この君だに、畏れも聞えたまひつき

ほどならましかば、・「とのたまふ。おはれに聞えたまひて、

尾君「何か、洩う思ひたまへむこと故、かう好き好きしきさまを見え

奉らむ。いかなる契りにか、見奉り初めしよりあはれに思ひ聞

ゆるも怪しきまで、この世のことは覺え侍らぬ」などのたまひて、

尾君「甲斐なき心地のみ、し侍るを、かの稚けなうものしたまふ御

一声、いかで、・「とのたまへば、女房「いでや、・、よろづ思し知

らぬさまに、大殿籠り入りて、・「など聞ゆる折しも、あなたな

り来る音して、業「正こそこの寺にありし源氏の君こそおはした

なれ。など見たまはぬ」とのたまふを、人々いとかたはらいたし

思ひて、「あな、かま」と聞ゆ。業「いき、見しかば心地の悪

しき歎みき」とのたまひしかばぞかし」と賢しと聞き侍たりと思し

てのたまふ。「いとをか」と聞きたまへど、人々の苦しと思ひたれ

ば、聞かぬやうにて、まめやかなる御訪ひを聞こえおきたまひて帰

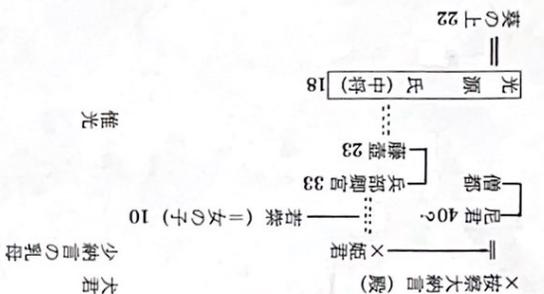
りたまひぬ。げに言ふ甲斐なきの気配や、ざりとわ、いとよう敬へて

む」と思す。



▲光源氏が加持を受けた北山の「なにかし寺」のモザイクとされ、ここで光源氏は業上を見出す。(源氏物語) (若紫)

人間関係図



(女子が藤壺の姫であることを知った光源氏は姫君(二女子)

を引き取りたいと尾君や僧都に何度も懇願する。尾君は「姫君が

まりに幼いから、と固辞する。尾君の容態がさらに悪くなって、)

源氏の君の座つていらつしやるところから、尾君の寝ている部屋

がたいへん近いので、尾君の心細うなお声がとぎれとぎれに聞

えてきて、女房が「ほんとうに恐れ多いことございます。せめて

姫君がお礼の言葉を申しあげられるくらいになりなさら。・

と尾君の言葉をお伝えします。源氏の君は悲しくお聞きになつて、

「どうして、淺はかかと思ひからこんな好色めいた話を申しあげられ

ましよう。どういふ前世の因縁なのか、姫君のお姿を初めて拝見し

たときから、心から愛しいと思つていますのも不思議なくらいで、

この世だけの縁ととは思われないのです。などおつしやつて、こ

のままでお伺いしたかがあります。せめてあのかわいらしい

お声を一言だけでも、なんとかして、・「とおつしやると、女房が

「さあ、どうでしょうか、・、姫君は尾君のご病状など何もご存知

ないように眠つていらつしやつて、・「と申しあげたようにその

時、あちらから姫君のやつて来る音がして、姫君が「おはあさま!

あのお寺にいらつしやつた源氏の君がいらつしやつたそうよ。どう

してご覧にならないの?とおつしやるのを、外に居る女房たちは

ひどくバツが悪いと思つて、「まあ、静かに」とお止めしています。

「だって、源氏の君を見たら気分が悪いのも置つた」とおはあさま

がおつしやつていきましたよ」と自分としては、すばらしいことを聞

き覺えていると得意になつて、女房にそのようにおつしやいます。

源氏の君は「ほんとうにかわいなあ」とお聞きになつていらつし

やいますが、そはの女房たちが困りきつているので、聞いていない

かりをなさつて、尾君に丁寧なお見舞いのご挨拶を申しあげて、お

帰りなさいました。帰り道、源氏の君は「なるほど、たわいもない

ご様子だ。でも、あの子を立派に育て上げたいものだ。」と思ひなさ

います。

光源氏にはワリコこの部分は何分にある。  
基本的には健康な成人の女性に  
と受容できない、何の問題も有りません女性に  
しれない